



エッセイ

ことばを通して共有する世界

子どもたちが苦手な作文活動を振り返る

本間 祥子*

© 2015. 「移動する子どもたち」研究会. <http://gsjal.jp/childforum/>

作文は苦手？

「先生、怒るかもしれないけれど、今週は作文が書けなかったの。ごめんなさい。」と、うつむきながらことわりに来る子。「先生、これ読んで。」と、保護者からの連絡帳を差し出してくる子。見ると、「作文の課題を仕上げることができませんでした。来週、2週分まとめて提出させます。」の文字が。はたまた、白紙の、何も書かれていないまっさらな作文帳を、何事もなかったかのように提出してくる子。作文の課題は、漢字練習帳や文法ドリルといった課題に比べて、あきらかに提出率が低い。毎週土曜日、シンガポールの日本語補習授業校にある、私のクラスに集まってくる子どもたちにとって、作文はどうも苦手な課題であるらしい。

漢字を正しく使う。それも習ったもの全て。ただ書いてあればいいというわけでもない。とめ、はね、はらい、送り仮名は正しく使えているか。さらには、原稿用紙の使い方、段落分けの仕方、句読点やカギ括弧の使い方。いわゆる「正しい作文」を書くためには、クリアしなければならないルールが山のようにある。これまで学習した事柄を総動員させねばならない作文を、毎週のように課されている子どもたちが、苦手意識を持ってしまうのも仕方の無いことかもしれない。私たち教員にとっても、作文の課題を添削するには、時間と労力が必要である。こんなに真っ赤になったノートを見たら、子どもが作文どころか日本語を嫌いになるのではないかと思っても、間違っているものをそのまま返却するわけにもいかない。

* シンガポール日本語補習授業校 (Eメール: blythe1110@gmail.com)

さらには、クラスの子ども一人一人へのコメント書きも一苦勞である。

素直な思い

そんな中、ある小学校3年生の女の子が、こんな作文を書いてきたことがあった。

『つかれました、休みます』

今日は、(あくび)ととてもつかれた日でした。ほとんどぼやーンとしてねむってしまいます。

(スヤスヤ)今日はなぜか、とてもねむいです……。日記がぜんぜんすみません。申しわけございません……。ねむくなると、どうしてもねむりたくてしょうがありません。ああ……。

今日はおそいので、申しわけございませんが、お休みなさい……。

ん、何だろう、これは。見開き1ページにも満たない作文。作文というよりも、お手紙とか独り言のような。でも、タイトルがあって、「始め、中、終わり」の三段落構成にまとめられた作文。読み終えた瞬間、何だか可笑しいような嬉しいような気持ちになって、職員室の片隅で、思わず笑みがこぼれてしまった。眠たくてうとうとしながらも机に向かって、何とか課題を仕上げようとする彼女の表情が思い浮かんだ。そして何より、日本語を通して表出する、彼女のリアルな思いに触れることができたような気がして、嬉しくなった。「ははは。あやまらなくていいんだよ。そんな日もあるよね。ゆっくりねてね。」と、短いコメントを書いた。そうか、それでいいんだ。作文とは本来、美しい日本語の文章を書くための訓練ではない。自分の思いをことばで紡いでいくためのものなのではないか。

それから、彼女と私の作文帳を通したやり取りは続いた。ある時は、自分が女優だったらどんな芸名をつけるかを話し合い、またある時は、最近夢中になっているドラマや映画の感想を伝え合い、彼女が普段通っている現地校での事件について話したりもした。まるで交換ノートのような些細なやり取りが、毎週土曜日の私の楽しみの一つになっていった。

日本で言えば秋も深まった頃、1年に1度設けられている保護者との個人懇談があった。彼女の保護者は困ったような顔で笑いながら、「先生、娘の作文のことなんですけど。いつも先生に失礼な文章を書いているんじゃないかと思って。本当に申し訳ありません。」と。彼女の作文の中には、「先生は、どう思いますか。」「私のしつもんに答えてみてください。」「さいごのコメントらんを書いておいてください。」といった、私とのやり取りを前提とした表現が並ぶ。確かに、小学校3年生の教科書に出てくるお手本の作文には、そんな表現は記載されていないし、教師の返答を前提とした作文を書いてくる子も少ない。でも、そうではなくて、

私が大切にしたいのは、彼女が伝えたいと思ったことを、彼女なりの表現で素直に書いてくれた、ということなのである。だからこそ、彼女の文章は読み手の心を楽しませたり、驚かせたりもする。その日、私は彼女の保護者に、彼女の書く文章こそ、私にとって心から嬉しいものなのだということを伝えた。

世界を共有したい

子どもたちは、よく私にこう訴える。「今週は何もイベントとかないから、作文書くことないよ。」と。そんな時、私はこんなふうに思う。何も特別なことなんて書かなくてもいい。日々あなたたちが感じていることを、日本語を通して、私に伝えてほしい。私は週にたった1回、3時間だけ、あなたたちに会って、ちょっと一緒に勉強をするだけの存在だけれど。そして、時には口うるさく叱ったりもするけれど。でも、あなたたちが見ている世界を、この先生とだったら、少しでも共有したいなと思える存在になれたらいい。そのために、先生も色々なアプローチをするから。

もちろん、文法も漢字も、段落構成も軽視することはできない。学年が上がるにつれて、子どもたちが学習する文章の種類は、どんどん増えていく。目的に合った文章を書く力も求められる。どれも子どもたちが歩む日本語人生において、重要であるだろう。ただ、彼女とのやり取りをきっかけに、作文活動という学習行為の本質に触れたような気がして、この思いを、どの子に対しても、いつも忘れずにいたいと思うようになった。

彼女のいるクラスを担当して1年。最後の授業の日に、子どもたち1人1人が内緒で手紙を書いてきてくれた。その中の彼女の手紙には、こんなことが書いてあった。「先生はいつも私の日記を読んで、おもしろいことを書いてくれます。本当に感謝しています。」と。感謝されるようなことは何もしていないんだけどな、と思いながらも、最後の手紙に、作文のことを書こうと思ってくれた彼女の気持ちが素直に嬉しかった。私のクラスを離れても、こんなふうに作文を書き続けてくれることを願うばかりである。そして私も、子どもたちと私との関係性を何より大切に、かれらが見ている世界を共有したいと思える存在になれるよう努めながら、かれらのことばを育てていけたらと思っている。